

沈黙の詩人と 数理の構造家

渡辺仁史



think the future from hitoshi watanabe lab.

●池原義郎のもう一つの顔/渡辺の持論

●恩師の2つの顔

池原義郎は、詩的な空間をつくる建築家として知られている。所沢聖地霊園に見られる静謐な佇まいや、松ヶ丘の家に漂う沈黙の気配は、建築界では「静けさの詩人」として評価されてきた。

だが、私はそのような池原像に、いっまでもどこか物足りなさを感じていた。私の知る池原義郎は、詩人であると同時に、構造と数理に強い関心を持つ“科学的思考者”でもあったからだ。

●数学と構造力学に秀でた若き日

池原先生は、実は非常に理系的な頭脳の持ち主であり、若い頃から数学や物理にずば抜けた才能を発揮していたと聞いている。構造力学の講義では「君はもう分かっているから試験を受けなくていい」と竹内先生から言われたほどだ。

●科学的アプローチの実践

このことは、先生の設計プロセスにも如実に表れていた。たとえば西武ライオンズ球場の設計では、施設の規模や動線、観客の流動解析をご自身で手掛け、関係者を説得されたと聞いている。

●テクノロジーへの理解と支援

コンピュータ導入が建築界にまだ根付いていなかった1970年代後半に、私の研究テーマのため自分の研究費を割いて、最新のパソコンを購入してくださった。芸術性だけでなく、数理や情報をデザインに活かすことに深い理解があった。

●詩と科学の統合：池原建築の本質

そうした理解は、建築を「もの」ではなく「思考の場」として捉える姿勢と深く関係している。池原建築の空間には、素材や光といった感性的要素だけでなく、必ずといっていいほど“構造的な骨格”が存在する。つまり、池原建築の詩性は、決して感性だけで成り立っているのではない。数理と構造によっても支えられているからこそ、説得力があるのだ。

●いま見直されるべき「理の建築家」としての池原義郎

デジタルやAIが建築を変える現代にこそ、池原先生のように感性と論理、詩と構造、沈黙と数理を共存させる建築家像が求められる。

池原先生の建築は、まさにその統合のモデルだったと、今あらためて思う。「構造の詩人」としての池原義郎を、もっと多くの人に知ってほしい。



DAAS interview vol.002 池原義郎 YOSHIRO IKEHARA, architect 2008より